

さようなら



プレスキット 2026

『さようなら』

LONG GOODBYE / 監督 野村有志

日本 / 2021 / 101分 / カラー / ステレオ / 日本語

英語・韓国語字幕対応 / DCPあり

クライムドラマ

製作 U.M.I Film makers
共同製作 オパンポン創造社

Film still © U.M.I Film makers / Opanpon Souzousya



作品概要

ログライン

淡路島の小さな工場で働く柴田は、3人の同僚とともに、雇い主が隠し持つ大金を盗み出す計画へ巻き込まれていく。停滞した日常から抜け出す好機に見えたその計画は、やがて4人が本当に望んでいるもの、そして一線を越えることの代償を浮かび上がらせる。

イントロダクション

西日本・淡路島を舞台にした『さようなら』は、諦念と変化への欲望のあいだで揺れる、ごく普通の人々を描くクライムドラマである。

柴田、末田、宮崎、チェンは、小さな工場で変わり映えのしない毎日を送っている。ある日、末田は社長が脱税によって貯め込んだ大金を隠し持っていることを知る。衝動的に始まった窃盗計画は、4人の鬱屈、野心、言葉にされなかった緊張を徐々に露わにしていく。

憂鬱さ、ブラックユーモア、サスペンスを併せ持ち、労働者の日常の反復から、先の読めない犯罪劇へと転じていく。

本作は、オパンポン創造社の代表的舞台作品の一つを映画化したもの。原作の脚本・演出を手がけた野村有志が、映画版でも脚本・監督・出演を務めている。

あらすじ

柴田、末田、宮崎、チェンは淡路島の小さな工場で働き、代わり映えのしない閉塞感のある日々を過ごしている。

末田は人生を変え、島を出ることを望んでいる。ある日、彼女は工場の社長が脱税によって得た大金を隠し持っていることを知る。

盗まれても社長は脱税が露見するため警察に届け出られない。そう考えた末田は好機を見だし、チェンを誘って金を盗む計画を立てる。

しかしチェンの暴走で計画は崩れかけ、末田は柴田と宮崎を巻き込まざるを得なくなる。

約束は単純だった。盗みに成功したら、金は4人で均等に分ける。だが一線を越えた瞬間から、それぞれは別々の欲望に従って動き始める。

その先に待つのは、単純な逃亡でも破滅でもない。一線を越えた先の、もう一つの日常だった。

作品について・映像表現

作品について

『さようなら』の中心にあるのは、ひとつの単純な問いだ。

人は本当に人生を変えられるのか。

それとも、どこへ行っても同じ鬱屈を抱えて生きるのか。

盗まれる大金は、そこに即効性のある答えを与えるように見える。島を出ること、やり直すこと、別の誰かになること。

しかし本作がより強く関心を寄せるのは犯罪の手順ではなく、「逃げられるかもしれない」という可能性が、それぞれの人間から何を露わにするかである。

変わりたいと切実に願う者。何も変わる必要はないと言い張る者。そして、自分が人生に何を求めているのか直視せざるを得なくなる者。

映像表現

『さようなら』の映像表現は、1970年代の日本の犯罪映画が持つ、荒く磨き込まれすぎていない質感と、日本アート・シアター・ギルド（ATG）時代に象徴されるインディペンデントな精神を参照している。

その参照点の一つが、『仁義なき戦い』シリーズに見られる生々しい映像言語だ。仕事場、室内、街路、そして人間の日常的な醜さを過度に美化せず、物質的な荒さごと画面に残す映画である。

また、サム・ペキンパーやドン・シーゲルらの作品に見られる、粗く即物的な映像のエネルギーからも影響を受けている。

淡路島を典型的な「美しい観光地」として撮るのではなく、蛍光灯の室内、使い込まれた工業空間、抑えた色彩、日常生活の重さを強調した。

狙いは単にレトロなルックを再現することではない。過去の犯罪映画が持つ映像の記憶を用いることで、登場人物たちの停滞感を補強し、彼らがまるで「すでに色褪せ始めた世界」の中で生きているように見せることだった。



監督コメント / 野村有志

「まずは本作に興味を持っていただき、ありがとうございます。どなたにも楽しんでいただける作品だと思います。同時に、いつか登場人物たちを自分自身のこととして感じられる方に届く作品でもあると考えています。僕自身がそうであるように、楽しんでもらえれば嬉しいです。」



主な上映・受賞歴

本作の国際的な評価を示す主要な映画祭・受賞歴を抜粋。

YUBARI INTERNATIONAL FANTASTIC FILM FESTIVAL

JAPAN / 2022

フィルミネーション賞

DAEJEON GEUMSI INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

SOUTH KOREA / 2026

New International Director Award - 野村有志

KOOKAI INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

INDIA / 2023

最優秀犯罪映画賞

最優秀女優賞 - 一瀬尚代

最優秀男優賞 - 野村有志

SWITZERLAND INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

SWITZERLAND / 2022

外国映画コンペティション部門 公式選出

WALLACHIA INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

ROMANIA / 2023

最優秀助演男優賞 - 川添公二

その他の上映・配信

EMIRATES AIRLINES

2023

機内エンターテインメント作品として選出

全映画祭・受賞歴は『さようなら』公式作品ページに掲載。

海外メディア・観客からの評価

WINDOWS ON WORLDS / 英国

映画批評家 Hayley Scanlon は、2022年ゆうばり国際ファンタスティック映画祭での上映後、『さようなら』をレビューした。

批評は「停滞」と「変化」の緊張関係に注目し、登場人物たちの島から逃れたいという欲望と、環境を変えても人生そのものが変わるとは限らないという不安を重ね合わせている。

Scanlon はまた、金が彼らの人生を変える可能性の象徴である一方、既存の問題を解決するのではなく、別の新しい問題を生み出していくことも指摘している。

「どこにいても、変えようとする意志さえあれば、変化は可能なかもしれない。」

Hayley Scanlon, Windows on Worlds - 2023年3月5日

LETTERBOXD / 観客の反応

同じ曖昧さを、別の方向から受け止めた観客もいる。その感想では、当初は本作を「人は変わらない」という点で徹底してニヒリスティックな作品と感じたものの、もしかすると自分が認めたくないだけで、この映画の見方の方が現実的なのではないかと考え直している。

二つの反応は異なる結論にたどり着くが、共通して本作の中心にある緊張を捉えている。人は自分の人生を変えられるのか。そして、変化には何が必要なのか。

windowsonworlds.com / Long Goodbye review

キャスト・スタッフ・作品仕様

キャスト

野村有志
柴田

一瀬尚代
末田

美香本響
ママ

川添公二
宮崎

伊藤駿九郎
チェン

殿村ゆたか
工場社長

飯嶋松之助
友情出演

メインスタッフ

監督・脚本	野村有志
撮影監督・編集 製作統括	武信貴行
撮影	太田智樹 / 竹田和哲 タニガワヒロキ
音楽	浜間空洞
録音	浅葉修 / 上原優香
ヘアメイク	KOMAKI
セット	久太郎
宣伝美術	勝山修平
製作	U.M.I Film makers
共同製作	オパンポン創造社

作品仕様

原題	さようなら
International Title	Long Goodbye
製作国 / 年	日本 / 2021
上映時間	101分
言語	日本語
画面比	16:9
音声 / カラー	ステレオ / カラー
映倫区分	No. 122953 / G
字幕	英語 / 韓国語
DCP	あり

連絡先

U.M.I Film makers - 総合窓口

umifilm@yahoo.co.jp

武信貴行

takenobutakayuki@gmail.com

